

長崎派遣で感じたこと

栗ヶ沢中学校 2年
平山 優奈

第二次世界大戦末期の1945年8月6日午前8時15分、広島に一発目の原子爆弾が投下されました。1945年末までに約14万人が亡くなった惨劇はこの3日後に起こりました。8月9日午前11時2分、長崎に2発目の原子爆弾が投下されました。死者約7万4,000人、負傷者は約7万5,000人にのぼります。その6日後、日本は戦争に負け、終戦となりました。私は戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、平和の尊さを学び、周囲の人に伝える「平和大使」として、長崎に8月7日から8月10日の四日間派遣されました。

長崎では、平和案内人による被爆建造物ガイド、原爆資料館の見学、青少年ピースフォーラムへ参加をしました。その中で私が印象に残った二つのことをお話しします。一つ目は、城山小学校にある「嘉代子桜」です。城山小学校は爆心地から500メートルほど離れた場所に建っており、当時城山小学校にいた学校職員、挺身隊、学徒報国隊など152人のうち、132人が亡くなりました。その中に林 嘉代子さんという当時15歳の少女がいました。嘉代子さんは原爆投下当時、城山小学校で働いていました。そして、11時2分長崎に原爆が投下されました。その日嘉代子さんが帰ってくることはありませんでした。翌日から嘉代子さんの母、林 津恵さんは毎日嘉代子さんを探し続けました。兵隊に叱られたことも度々ありましたが、「生きてまた愛娘に会いたい」という一心で探し続けました。そして、探し始めてから21日目、嘉代子さんは瓦礫の中で焼けた遺体となって発見されました。津恵さんは変わり果てた娘の遺体を運び、運動場の片隅で火葬しました。私はこの話を聴いている最中、あまりの酷たらしさに言葉が出ませんでした。嘉代子さんや原爆で亡くなった人々は、国のために身を粉にして働いたのに、最後はこんなに無惨なものだったのです。原爆で生き残った方は、

津恵さんのように信じられない現実を押しつけられ、心に深い傷をおいました。そして、戦争が終わってしばらくたった頃、津恵さんは、桜が好きだった嘉代子さんと原爆の犠牲となった人々を偲び、城山小学校に桜の植樹を訴えました。ですが、当時は原爆のあとには草木が生えないという噂があったため反対されました。しかし津恵さんは「嘉代子や女学生の魂が立派に桜を育ててくれる」と言い切り、1949年に50本の桜が植樹されました。その後、桜は原爆に負けず、立派に育ち、今でも美しい桜の花を咲かせています。

二つ目は、青少年ピースフォーラムの戦争疑似体験です。青少年ピースフォーラムは、被爆の実相や平和の尊さを学習し、平和意識の向上を図るプログラムです。青少年ピースフォーラムでは、「被爆者の話」、「戦争疑似体験」、「原爆の概要」、「こちんまりフィールドワーク」の四つの平和学習をしました。その中で私は「戦争疑似体験」が一番印象に残りました。まず始めに「大切なものカード」を作ります。人やペット、ものや場所を一枚につき一つ書きます。書き終わった後、疑似体験が始まります。明かりが消され、暗い室内で空襲警報が鳴り響きました。それが鳴り響くたびに、少しずつ生活に「制限」が付くようになりました。電子機器が使えなくなり、自由な外出ができなくなりました。戦争真っ只中になると18歳以上、60歳未満の男性が兵隊として兵に出されました。私の手元のカードは次々に奪われていきました。そして、8月9日午前11時2分。原爆が投下されました。原爆が投下された後、私の手元には一枚もカードが残りませんでした。それなのに自分の命だけが今も残っているという現実には嫌悪感を抱きました。でも、それと同じ位失ったものの存在がどれほど大切なもので、どれほど大きな物なのかを知りました。

私は、この派遣を通じてたくさんのことを学びました。人々の自由を次々に奪った戦争を、一瞬にしてたくさん命を奪った原爆を忘れることなく、長崎を最後の被爆地にするため、平和大使として語り継いでいきます。